

# 過 去 を 語 る

WW Sales プログラムディレクター  
**Bob Neidig**

長年IBMのワールドワイドSalesのプログラム・ディレクターを務めた、Bob Neidig氏。日本企業とは異なり、米国には定年退職制度がないため、Neidig氏は74歳まで現役を続け、2013年末に退職されたばかりです。System/360誕生のときから携わってきた、まさにIBMメインフレームの「生き字引」といった存在です。Neidig氏に、当時の思い出をお伺いしました。



—IBMは、1964年4月7日に、IBMメインフレーム「System/360」を発表しましたが、それ以前の状況についてお聞かせください。

**Neidig氏** System/360以前は、相互に互換性がなく、アップグレードも難しい、多種多様なコンピューターが作られていました。しかし、1964年4月7日に行われたSystem/360の発表によって、速さや機能の違いはあっても同じソフトウェアを実行できる一つのコンピューター・ファミリーが誕生したのです。この革新的な最初の発表では、ハイエンドとローエンドの性能に50倍の開きがある6種類のコンピューター・ファミリーが紹介されました（モデル30、40、50、60、62、70の6種類。モデル62と70は後にモデル65と75に変更）。また、このとき合計40種類もの周辺装置も同時に紹介されました。

—この革新的な開発は、IBMにとって巨額の投資だったのでしょうか。

**Neidig氏** そのとおりです。System/360というコンピューター・ファミリーでは、リソースを管理するための新しいオペレーティング・システムのほかに、商用アーキテクチャーと科学的アーキテクチャーの両方を組み合わせていました。Tom Watson Jr.は、この大胆な新しいコンピューティング・アプローチに「IBMの社運を賭けた」のです。IBMは50億ドル、現在の価値に換算すれば100億ドルを下らない金額を投じたはずですが。後になって聞いた話ですが、この投資は、原子爆弾の研究開発プロジェクト「マンハッタン計画」よりも大規模なものだったようです。コンピューター会社1社による一つのプロジェクトが、国家の大規模プロジェクトの投資を上回っていたなんて、信じられますか？ もしも、このSystem/360プロジェクトが失敗していたら、ビッグ・ブルー（IBM）は20世紀にとくに姿を消していたと思います。

—IBMの社運を賭けた投資は大成功だったわけですね？

**Neidig氏** はい。幸いなことに、IBMのお客様の反応は非常に良く、最初の1カ月で1,000台を超える注文が入りました。ニューヨーク州のポケプシーでは、System/360の大量配送が原因で、ルート9(国道)が大渋滞になったと聞いています。多少誇張されているとは思いますが、50年前のうれしいエピソードです。

—当時Bobさんは、発表にはどのように関わり、どのように感じられましたか？

**Neidig氏** その当時、私は営業所のシステム・エンジニアでした。System/360がお客様に満足していただけたことに全員で大喜びしました。お客様はそれまで、それぞれのシステムの保守と運用、そしてシステムに関するユーザー・トレーニングなどを行う必要があり、また、互換性のない多数のシステムに対処しなければなりませんでした。しかし、System/360によって、そのすべてが解決したのです。

私はそれまで1401システムと7074システムの両方に携わっていましたが、個人的に、System/360の革新的な発表の重大さと大胆さ、そして完全に生まれ変わったアーキテクチャーに、心から感銘を受けました。当時まだ入社間もないころでしたが、この発表が歴史的な発表だと思い、その場に居合わせた幸せを感じました。本当にエキサイティングでした。

また、オペレーティング・システム(OS PCP、MFT、およびMVT)の環境や内部についてのトレーニングを受けられる初期のIBM教育クラスの一つに参加し、この新しいアーキテクチャーを習得しようと、一言も聞き漏らさないように一生懸命勉強したものです(笑)。私が担当していたあるお客様は、初代System/360のモデル65をインストールして「ハイパーバイザー・モード」で実行し、お客様の既存の7074プログラムを新しいOS/MFT環境と並行して実行できるようにしていました。私同様、お客様もエキサイトしていましたね。

—技術的な視点での、重要なイノベーションは何だったのでしょうか。

**Neidig氏** 「マイクロプログラミング」(マイクロコード)が追加されたことで、System/360ファミリーの全製品で同一の汎用命令セットが使われるようになったこと、データ安全性とセキュリティのベースが最初から組み込めるようになったこと、CPUリソースの負荷を軽減する新しい「インテリジェントな入出力サブシステム」が開始されたことなどです。最新のコンピューター・チップ・テクノロジーであるソリッド・ロジック・テクノロジー(SLT)ロジックが採用されたことも重要です。



System/360(1964年発表当時)

—この技術的な革新、そして新しいアーキテクチャーへの移行という状況の中で、以前の互換性のないシステムからSystem/360へ移行するのは難しくはありませんでしたか。

**Neidig氏** IBMがハードウェアやソフトウェアに変更を加えても、お客様はプログラムを変更したり、再コンパイルしたりする必要がないことを、IBMはSystem/360の発表で保証しました。具体的には、System/360以前のシステムである1401や7074用に「エミュレーター」を提供して、新しいSystem/360アーキテクチャーへの移行をスムーズに行えるようにしたのです。1960年代に書かれたCOBOLプログラムの多くが現在でも実行されていることは、この時のアーキテクチャーの先見性、上位互換性の素晴らしさを証明しています。System/360のアーキテクチャーは、コンピューターの歴史に大きな影響を及ぼしたということです。

—Bobさんは、ドッグイヤーと呼ばれる速さで急激に進化するIT業界で、IBMメインフレームと共に50年以上も携わってこられたわけですが、最後に一言いただけますでしょうか。

**Neidig氏** 強調したいのは、System/360が、この50年にわたり情報技術の根幹であり続けている製品シリーズの“始まり”であったということです。そして、コンピューターの歴史において、商業的にきわめて重要かつ不朽のアーキテクチャーであるということです。System/360は、「ヘンリー・フォードのモデルT」「ボーイング707」と並んで、米国ビジネス史上の3大偉業に数えられています。わたしはその誕生当初から担当者として立ち会えたことに誇りを覚えるとともに、この幸運に非常に感謝しています。

—どうもありがとうございました。